

## 「はりま昆虫フォークロア」を『バンカル』に連載



赤松の郷 昆虫文化館館長

あい さか こう さく  
**相坂 耕作**さん

昆虫の標本や昆虫にまつわる玩具、民芸品などを収蔵展示する「赤松の郷 昆虫文化館」（上郡町）の館長で、『播磨の昆虫』（神戸新聞総合出版センター）などの著作でも知られる相坂耕作さん。昆虫に対する自然科学的な調査・研究を行い、兵庫県版レッドデータブックの昆虫部門の専門委員などを務める傍ら、昆虫への民俗学的なアプローチにも力を注ぐ斯界の第一人者で、姫路市文化国際交流財団が発行する総合文化雑誌『バンカル』にも、2019年冬号から「はりま昆虫フォークロア」の連載を開始。カマキリに続き、春号ではテントウムシを取り上げます。

相坂さんは現在、姫路市大津区に住んでいますが、幼少年期を過ごしたのは国鉄（現JR）姫路駅にも近い南畝町。今ではとても想像できませんが、相坂さんが子どもだった昭和20年代から30年代にかけての頃は、そのあたりでもギンヤンマが飛び交い、近くの川にはタイコウチやタガメなどの水生昆虫もいたそうで、「幼くして昆虫の魅力にはまってしまったんです」と話します。それを物語るのが、手に虫籠を持って満面の笑みを浮かべる3才のときの写真だそうです。それ以来「昆虫一筋の人生だった」と振り返ります。

高校卒業後は市内の会社に就職。コンクリート技士として働きますが、本人曰く「休みの日はもちろん、仕事のときも時間の合間を縫ってトンボの採集に励んだ（笑）」。瀬戸内沿岸では初となるタイリクアキアカネを採ったこともあるそうです。

26才のときに初めて台湾を訪れ、珍しいチョウやトンボを採集。フィールドを海外にまで広げましたが、「無駄な殺し方、採集はしない」というのが相坂さんのポリシーで、次第に関心は昆虫の採集より調査研究に移り、併せて昆虫をモチーフにした玩具や民具、民芸品の収集にのめり込んでいきました。「昆虫の採集に行っても雨だと動けない。そういうときにお土産屋さんなんかに行って、虫のものはないかなと探すんです」

こうして集めたコレクションの保管場所として、1993年に上郡町岩木の空き家を借りて「播磨昆虫民俗資料館」を開設。建物が老朽化したので、13年前に同町の旧赤松幼稚園跡に「赤松の郷 昆虫文化館」を開設して現在に至ります。自宅のある姫路市ではなく上郡町に開設したのは「賃料が安かったのと、上郡町が昆虫の宝庫だったから」。土日祝日だけの開館ですが、観覧料は無料。そのあたりに「昆虫文化を広く知っていただきたい」という相坂さんの思いが詰まっているようです。

### 表紙解説

書写の里・美術工芸館

#### 宮澤由雄作 のぞきからくり『女一代嗜鏡俊徳丸』より 看板ソデ絵「衣装比べ」

大正時代頃 三原市歴史民俗資料館蔵

新春特別展示 宮澤由雄生誕150年「姫路押絵」展 出品作品

会期：2月24日(日)まで

押絵は、絹などの布に裏側から綿を入れてくるんだ部材を組み合わせて、人物や花鳥などを半立体的に表現する布細工で、羽子

板などによくみられます。姫路押絵は他地域に比べてふっくらと厚みがあり、人物や動物の目玉に「入れ目」というガラス玉を使用する技術や、ちりめん布を細かく起伏させた顔や手などによるリアルで迫真力のある表現が特徴です。

独特の技法が雅やかな世界を創りあげる姫路押絵は、明治生まれの宮澤由雄によって「のぞきからくり」のネタ絵を中心に迫真の表現力で全国に広まりました。そして、その伝統技法は石田鶴子、宮澤貞次、岡村延栄らの子どもたちを中心に受け継がれてきました。